空海僧正全集

別巻六

# 室生犀星全集

別巻二

新潮社

室生犀星全集　別卷二

昭和四十三年一月三十日　發行
昭和五十一年八月三十日　セット版

著者　室生犀星（むろふさいせい）
發行者　佐藤亮一
印刷所　二光印刷株式會社
發行所　株式會社　新潮社
〒一六二　東京都新宿區矢來町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四一八〇八

（全十四冊セット）定價　四九、〇〇〇圓

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

新宿加藤製本株式會社

# 室生犀星全集　別巻二

編纂

三好達治
中野重治
窪川鶴次郎
伊藤信吉
福永武彦
奥野健男

題字

西川寧

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

# 別卷二　目次

## 日記

昭和二十七年（六月二十四日—十二月三十一日）……九
昭和二十八年（一月一日—十二月三十一日）……七四
昭和二十九年（一月一日—十二月三十一日）……一六二
昭和三十年（一月一日—十二月三十一日）……二二〇
昭和三十一年（一月一日—六月七日）……二七五
昭和二十三年（補遺）（三月三十日—八月三十一日）……二九四

## 書簡

自大正二年—至昭和三十六年……三三五
書簡索引……四八三

## 補遺

老いたるえびのうた（遺作）……四九一
我が愛する詩人の傳記（佐藤惣之助）……四九二

## 後記

死、葬送とその後……中野重治　五〇七
附　記……伊藤信吉　五一〇

## 附録

年　譜……五一三
書　誌……結城信一　五二九

# 日

# 記

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

# 昭和二十七年

〔六月二十四日より十二月三十一日まで〕

18.5cm×13cm・紺色布厚表紙の一九五二年度社會人自由日記・背表紙の張紙に「凡凡帖、起丁昭和二十七夏七、終丁昭和二十八年十二月」とあり・青インキ使用ペン書き

六月二十四日　火曜日

仕事、暮鳥詩集の編集はほぼ終る。

小説の題は「マヤといふ人」にするか、まだはつきり決まらない、小説の題は難かしくてこまる。

二十五日　水曜日　くもり

仕事、中野から「鷗外その側面」を送つて來た。中野重治は本さへ出れば送つてくれるが、こちらは返すべき本が出ないのでこまる。

二十六日　木曜日　くもり

小説の題は「マヤ記」とあらためた。

ゆうべ隣の新夫婦來訪。

荷作りトランク二個、手提げ二個、

仕事、三十日までかかる豫定、稿料は輕井澤でとる、「改造」

二十七日　金曜

杏五六十實る。やや熟れた好い色なり。

八幡神社の森にこの夏はじめての朝日蟬の聲を聞いた。去年も一昨年も六月はじめに輕井澤に行つたので、馬込の蟬の聲は聞けなかつた、何時聞いても、この灰色の小蟬の聲は鄙愁的で美しい。

二十八日　土曜　くもり　のちはれ

新聞に福田正夫逝去が報じられてゐるが、腦出血のためとある、最近謄寫版刷りの俳句報告板のやうな四頁くらゐの雜誌を出してゐたが、それも思ひ合されて哀しい、大名を馳せなかつたらそもそも文學なんぞ何の足しにもならないものである。

三笠書房印税五千圓（税込）ととく。

「小說朝日」稿料二度拂ヒの分來月五日に支拂ふといふ、二度分割の一度分が遲れては危ないものである。

「暮鳥詩集」編纂本、原稿を手交、編集料二萬五千圓解說料等速達でけふ中に送るやうにいふ。

和夫夫妻と大森に出て茶を喫む。小池醫師へのお中元やうかんの折をおくる。

とみ子に五千圓小遣として與ふ。

しづ子に七月分給料先拂をする。

夜、新潮社佐野英夫から速達、山村詩集の解說稿料を送つたと書いてあるが、領收書が同封されたまま金がはいつてゐない、どういふ間違ひか、問ひ合せの手紙出すことにする。

河出書房の古山高麗雄やはり夜來訪、小說大系印税一萬二千と外に「文藝」稿料五千百圓をととけてくれた。

二十九日　日曜　はれ

新潮社から現金書留にて二萬五千圓着く、現金書留は便利で都合がよい。

けふ或人の葉書のあとに

杖ついてありくは人かかげろふか

買物その他荷作りも大半終へ、出立するばかりになつた。

三十日　月曜　はれ

荷物二個をおくる、

「改造」に「マヤ記」三十五枚手交、これで仕事ヲ全部終つたわけだ。

〔七月〕一日　火曜日　少雨

和夫と朝子送つて來る。上野では行列がなくなり車中ではらくにすわることが出來た。和夫から菓子をもらふ。

輕井澤につくと西澤のおかみさん、小林秋湖、つるやの番頭さんが迎へに來てゐた。夜、あまりに疲れてゐて十一時までねむれなかつた。夜雨いたる。

二日　水曜　少雨

買物をととのふ。新聞をみると山本實彥胃潰瘍で逝去を知つた。去夏元氣だつたのに、命のはかなさを知る。香花料を

送る。

改造社から小説の稿料半額二萬五千圓ととく。

はなれの屋根がまたボロになり、穴があいて、疊一丈がくさつた。また、屋根を葺きなほさなければならない、大工に見積らせると坪九百圓で二萬圓かかるさうだ、しかし打ちやつておくわけにゆかないから、至急やらせることにした。

けふもなほ疲れてゐて、困つた。

三日　木曜　少雨

朝はやく豆腐やが豆腐一丁を持つて挨拶に來た。去年のくロネコは大きくそだつてゐるが、今年は白いネコをよそから貰ふはずだから、夏だけ貸してあげるといつた。ネコを借りるのも變なものである。しかも二年つづけて借りるのは、なほさら變なものである。

白のあやめを生けて見たが、思ひ切つて大膽な生け方をして見た。門ぎはの朴の花はまだのこり、春蟬の聲が雨のはれまに鳴いてゐる。

四日　金曜　はれ

北住トタンやから、だんごを十串持參、今年からまただんごを作つたから、よろしくといつて來た。

やねや來る、五千圓手付を打つ。

西澤やほやから、岩魚三尾持參、

疊や來る、七日からしごとに來る由、

散歩の道すがら或る汚ない外人、ドイツ女らしいのがこれも汚ないお婆さんに手を合すから、犬の子を貰つてくれといつて、賴んでゐた。手を合すからといふのは、日本の最高の禮儀だと思つたからであらう。

豆腐やからまた豆腐一丁を持參、お金はいらないといふ、豆腐やが豆腐を持つて來て挨拶にかへるといふことは面白い。

五日　土曜　はれ

千代田銀行から二萬圓到着、屋根屋と大工に廻す金に加へるためである。

川べりに花をさがしに行く、生けて榮えない四五本を摘み取る。

草刈りやラジオの直シがそれぞれ千圓、ここは何でも千圓までセリ上げるのが定式らしい。

きのふ三石勝五郎來訪、卦を見てもらふ、曰く七月に變つたことがあるといひ、中氣をわづらふ卦もあるといふ。去年の夏に當つたことが二つあつたが、今年は當るやうなことがない、突き込んでいつてくれれば、占ひに引き込まれても見たいのだといふと、そんな强氣では八卦の方が敗けるかも知れないと、笑つて言つてゐた。

六日　日曜　あめ　晴れ

折口信夫、若い學徒をともなうて見ゆ。どこかのおしるこのみやげを貰つた。東京であつたときより元氣のやうで、神經痛も一先づ小康の由、かへりに若い學徒の人が、折口信夫の靴の釦をはめてゐたが、手が利かないためであらうが、今どきかういふ若い學徒がゐるものだらうかと、その師につくすいたはりに打たれた。

苔を植ゑた。小林秋湖來る、俳句會をしたいといふ。はなれを貸すことにした。

去夏亡くなつた早川調髪師にお線香を上げようと訪ねたが、家人は留守であつた。窓から手を入れて勝手口の齒磨粉やコップを置いてある小棚の上に、菓子のお供へ物を置いてもどつたが、不幸な早川をしのぶによい日だつた。

文部省藝術課に乘車證返還。

去年來てゐたシロ猫來る。

七日　月曜　くもり　少雨

すべりの花ちる。

疊や來る。毎夏の例にならつて味噌漬數個を持參、これはこの人の夏の挨拶である。

早川調髪師の未亡人が來た、きのふのお返しに菓子を持つて來た、早川の一週年忌をすましたら、東京に出て何かはたらいて生活したいといふ、男なんてみなスケベイだと五十女のこの人は露骨にいつたが、かういふ卑しい言葉を平氣でいふほどになつてゐるのかと思つた。

八日　火曜　くもり　少雨

疊や來る。朝の七時に來たが、みよだの在から自轉車で一時間かかるから、六時に家を出ないと來られない、はたらき者といふのはこの男のことであらう。

藝術院から無料乘車證の一ケ月延長分を送つて來た。さきの分はわづか一ケ月であるから何の役にもたたない、併し自分にはたとへ、一ケ月延びても、つかひやうがないのである。

土とおなじいろをした蛇は美しさもなく、ただ長たらしくゴムのやうに無感覺で氣味が惡い。ひと際さびしい生きものである。

九日　水曜　くもり　雨

勝手納屋の前に一本の赤飯の木が生え、ふとりも、葉の張り方もたねから大きくなつたものでないやうに見えた、すぐ表庭のすみに植ゑかへた。根の張り方も深さも、どうやら誰かが植ゑたものに思へた。俳人小林秋湖が來たから去年の赤飯のたねを頒けてくれといふと、納屋の前に植ゑておきまし

たといつた。君だつたのか、どうも變な處に赤ままの木が生えたと思つてゐたと、自分は秋湖と去年約束したことを思ひ出した。

赤飯の木といつても、普通の蓼ではなく、せいの高さも五六尺になる色つやのよい、大蓼の木なのである。去年秋湖から一枝をもらひ、その美しさに見恍れたものであつた。

夕方おそく、みえ子、やまめ四尾持參、おほがらな縞狀の斑點のある山女魚を見たのも、久振りであつた。この土地ではいつも岩魚ばかり獲れて、やまめはすくない、白燒きにして置いた。

十日　木曜　くもり　少雨

疊や終る。表、その他五千五百圓。

ラジオ東京詩の使用料七百五十圓ととく、

きのふ折口信夫を訪ねようとし、愛宕山に登つて行つたが、番地の控へをわすれて分らずに戻つた。不二屋で菓子を買ひ、西澤の主人にあんないして貰ひ再び登る。

岡野學徒がおしるこを作つてくれ、しらたまのつぶが揃つてゐて、ていねいなしる粉であつた。あとで紫蘇の實のあしらへが出た。かういふものを用意してゐることにも、岡野學徒の心づかひのほどが判つた。折口博士は坂の下まで送られ、別れた。男世帶でゐて折口があたらしい浴衣のおろし立を着てゐたのにも、驚いた。

十一日　金曜　あめ折々

岩魚といふものは谿流が涸れても、ほんの少しの水があると氣永く、水が出るのを待つてゐるさうだ、たとへ、からだを平つたくしてゐなければならないやうな乏しい水でも、水さへあればそこで出水をたのんで、おちついてゐるさうである。

「小說朝日」稿料一萬二百圓ととく。

川べりに出ると三尺くらゐの山かがしが、ふいに叢にはいり込んで、少時するとうごき出した。雜草のあたまがほんの少しゆれ、草のあひだに、內側から簾をすかして見たやうに、山かがしの文樣がちらちらと移りながら動いて、すつかり見えなくなつて了つた。頭も大きくいきいきとせいかんな奴だつた。今年にはいつてはじめて蛇を見たのである。美しいと見ればこいつほど美しい奴はなく、にくにくしく眺めたらこれほど厭らしい奴はゐないが、けふは憎心なくつくづく見とれることができた。この矢ケ崎川の石垣のあひだにはかなりたくさんの同類が棲んでゐるのだらう。しかも、ほんのわづかしか草のさきがうごいてゐたのは、よほど大きい圖體がたくみに草の根元をすべつて歩いてゐるためであらう。

十二日　土曜　くもり

がらがら蟬鳴き夏にはいる。

硝子や硝子をいれに來る。硝子のわれてゐるのも、折がないとなかなか入れられないものである。

梅雨ぐもりの輕井澤獨特の氣の滅入るやうな、風のない靜かな日である。自分で燐寸を擦つてたばこをのむと、その火が赤茶けて見えるほど薄ぐらい、濕氣のある山中の鬱たうしい一日がくれかからうとしてゐる。

十三日　日曜　はれ

屋根や來る、トタン屋來る、「寛直シ」

みえ子來る、しづ子と砂をはこんで貰ふ。

ラジオ來る。ラジオ直シ。

去年の卵賣りの婆さん死去の由。

高山骨とう店來る、横山美智子の部屋の件。

十四日　月曜　雨

ゆうべ晩くわすれてゐた迎へ火を焚く。

何時も行く藥局でパンビタンを買ふと、五百圓札と百圓札と、五十圓札に十圓札の新刷のお剩餘をよこしたが　よくも、こんな新刷紙幣があつたものである。輕井澤はあたらしい紙幣が多いところであるが、この藥局は特別なやうである。女の調劑士が主人でだんなさんは一日店かざりをしてゐる。こまかい藥品をつみかさね、すぐ見分けられるやうにならべることは、毎日手入れがいるのだ、庭をつくるのと同じものかも知れない。ちよつとでも怠けてゐたら藥品のつみかさねが亂れるであらうし、藥屋はこのならべ方が一等かんじんな仕事かも知れないのだ。

豆腐やに寄つて黒猫を見たが、薄眼をあけてぢつと見つめてゐた。覺えはあるまいと思つた。

夏菊を生けてみた。やつと、菊が生けられるやうになつた。菊のやうにつんとつつ立つたものは、生け方がむづかしい、葉のえらび方に注意がいるやうである。

十五日　火曜　はれ

屋根や來る、大工來る、經師や來る。

大工の弟子はけふは十五日だから、午後は休ませてくれといふ。何處に行くのだといふと、釣をしに行くのだとこたへた。何を釣るのだといふと、岩魚を釣りに行く、若し釣れたら持つて來るといつた。東京の徒弟なら、休みには淺草に行くとか、映畫を見に行くといひさうなのに、山の町では遊びに岩魚を釣りに行くといふのでは、遊びにも先きが見えてゐて、可哀想であつた。よしよし、たくさん釣つて來たまへといふと、では、行つて來ますと十九になる徒弟はいそいそと



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com